

コロナ禍を経た家事の変化

花王株式会社コンシューマーインテリジェンス室 室長 秋田 千恵

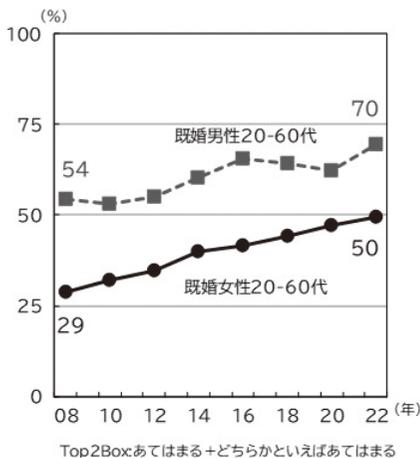
2020年の新型コロナウイルスの脅威から3年、私たちの暮らしには大きな影響がありました。23年5月の新型コロナウイルス5類移行によって、ようやく落ち着きと活気を取り戻しつつあるようです。花王ではこれまで生活者の暮らしに関わるさまざまな調査研究を行っており、社会や生活環境の変化によって生活者の暮らしに対する意識や行動も変化していると考えています。ここではコロナ前からみられていたこの10年ほどの家事変化を俯瞰して捉え、その中で起きたコロナによる生活変化と家事への影響を考察し、これからの家事について考えました。

1. この10年の家事の変化

家事はどの家庭でも日々行われており、毎日同じことの繰り返しのように感じられるかもしれませんが、データで振り返ると、この10年ほどで大きく変わってきています。

まず、家族内での家事の分担が進んだということです。「家事の負担を減らすため、できるだけ家族で分担している」人の割合は、2008年と比較する

図1 家事の負担を減らすため、できるだけ家族で分担している

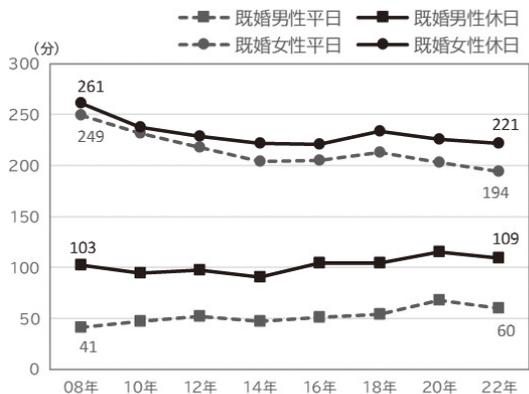


と既婚男女とも大きく増加しています(図1)。専業主婦が多かった時代では、男性も女性自身も、家事は主婦=女性がやるものと考える人が多かったのですが、共働きが7割(注1)、特にフルタイムで働く女性が増え、男性も家事を行うようになってきました。結婚相手に求める条件として女性が重視するのは、「人柄」に次いで「家事・育児の能力や姿勢」をあげ、特に近年は大きく上昇しています(注2)。

家事分担が進んだ背景には、平成5年以降の家庭科男女必修の教育を受けた世代が結婚して家庭を持ち、夫婦共働きで家事も分担するスタイルが定着したことが大きいと感じています。この世代は「家事は女性がやるもの」という意識は低く、「できる方ができるときに、というスタンスで押しつけ過ぎない。担当ではなく、あくまで思いやり(30代男性)」、「夫婦とも同じやり方をできるようにし、途中から代わってもできるようにしている(30代フルタイム女性)」など、夫婦できっちり分担するというよりは、できる方が家事をやればよい、と柔軟に考えていることも上の世代との違いです。

ただし、家事時間を見ると、女性の家事時間は減少したものの、男性の家事時間は大きく増えておらず、今も女性の家事負担が大きいこともわかってい

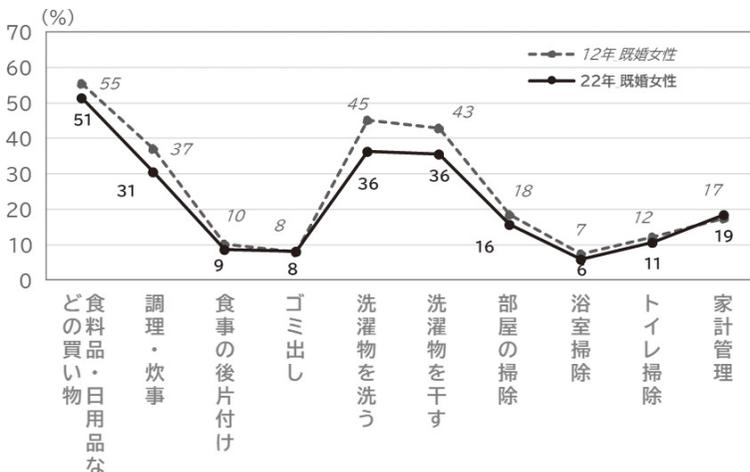
図2 家事時間



注1 令和4年の共働き世帯は1,191万世帯、専業主婦世帯は430万世帯(男女共同参画白書令和5年版)

注2 出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所、2021年実施)によると、女性が男性の「家事・育児能力や姿勢」を重視する割合は70.2%、前回(2015年)の57.7%から大きく上昇

図3 好きな家事（既婚女性 20-60代）



ます（図2）。コロナの影響で働き方が変わってきたとはいえ、家事時間の男女差が少なくなるにはもう少し時間がかかるのかもしれませんが。

一方で、家事への向き合い方も変わってきています。既婚女性に「好きな家事」を聞くと、「食料品・日用品などの買い物」や「洗濯物を洗う」が上位にあがっています（図3）。以前は洗濯が好きな理由を聞くと、「汚れた衣類がきれいになるので気持ちがいい」、「取り込む時のおひさまのおいが好き」といった声が多く聞かれました。ただ最近では洗濯物を外干しする人も以前より減り、忙しい生活の中でゆっくり家事の仕上がりを確認する時間も少なくなっています。仕事と家事の両方を行う中で、家事は「仕事で疲れていてもしなきゃいけない、でき

るだけ時短で済ませたいもの（20代女性）」、「やらなくてはならないもの。面倒くさい。できればたくさん（30代女性）」という声が聞かれます。「家事は手間ヒマがかかっても、きっちりやるべき」という人は2012年頃からだんだん減っています（図4）。ドラム式洗濯乾燥機やロボット掃除機などの家事をおまかせできる家電製品の普及、家事分担の増加など、家事には手間をかけず、できばえにこだわるよりも効率的に行い、日々の生活をまわすことが優先されています。

「家事や育児のためには、自分の自由な時間が犠牲になるのもやむを得ない」と思う人も減りました（図5）。忙しい生活だからこそ自分の時間を持つことも大事で、無理をしてまで家事をしたくないと考

図4 家事は手間ヒマがかかっても、きっちりやるべきだと思う

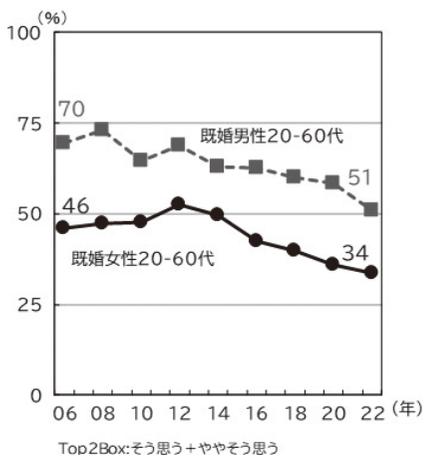


図5 家事や育児のためには、自分の自由な時間が犠牲になるのもやむを得ない

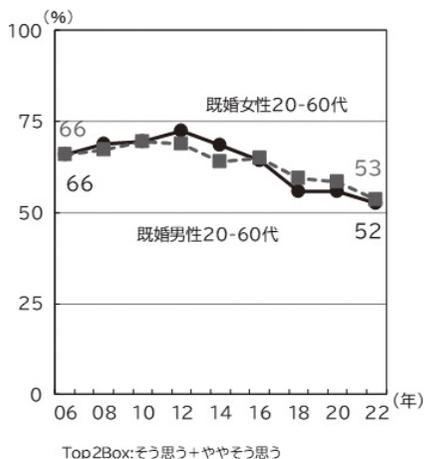
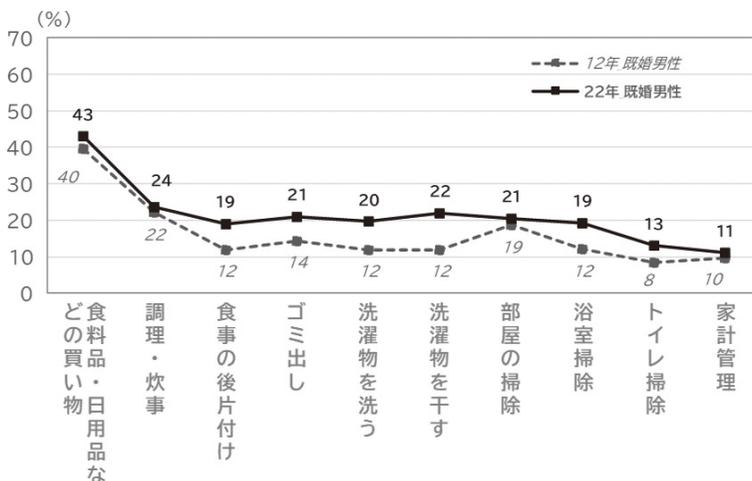


図6 好きな家事（既婚男性 20-60代）



えているのです。

一方、女性の家事好きが減少する中で、家事が好きな男性は増えています（図6）。家事時間の少ない男性だからではないか、という見方もできますが、家事をするようになり、渋々やるのではなく家事の面白さを感じながらやっている部分もあるのではないのでしょうか。女性と比べると好きな家事に偏りが少なく、食器洗いや風呂掃除は女性よりも好きな人が多いことがわかっています。

主婦が主に家事を担っていた時代から、誰もが家事に関わる時代に変化する中で、きっちり完璧な家事を目指すよりも、自分の自由な時間も持ちながらストレスなく日々の家事をまわすことを重視するスタイルへ、大きく転換してきています。

2. コロナ影響による家事の変化

そのような中で、2020年4月新型コロナウイルスの影響で緊急事態宣言が出され、外出制限によって在宅時間が増えたことで、家事に大きな変化がみられました。「在宅時間が増えたので家事を負担に感じている」、「家の中のほこりや汚れが気になるようになった」人はいずれも半数を超えていました（図7）。

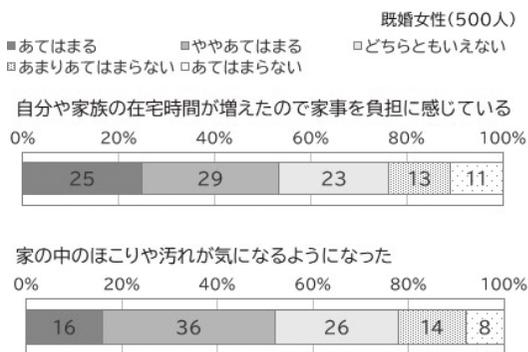
在宅勤務をきっかけに、夫が妻の家事負担の大きさに気づく場面も多くあったようで、「時間的余裕が増えたので、家事を積極的にやるようになった（50代男性）」など中高年男性が進んで家事をする

様子や、「今まで妻に任せっきりだった食事作りが自分の役割になった。作った料理をアプリに投稿して、ポイントを獲得することが励みになっている（30代男性）」など、若い世代ではより家事に前向きに取り組む声も聞かれました。

長い時間を過ごす家の中で快適に過ごしたい意識も高まり、「裸足でいると、リビングや玄関の床のザラザラが気になって、休憩中に掃除機やクイックルワイパーで掃除をするようになった（30代男性）」「在宅勤務をしていると部屋干しのいやなニオイが気になりだし、抗菌機能もある柔軟剤を使うようになった。（30代女性）」などこれまで気づいていなかった汚れやニオイに対処する様子もありました。

在宅ワークについて詳しくみると、在宅ワークの満足度は高く（注3）、特に若い世代ほど満足度が

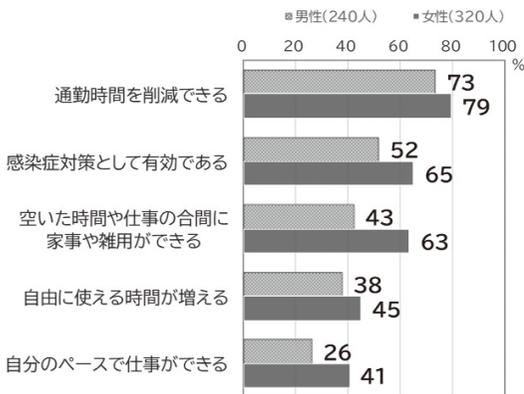
図7 20年5月コロナによる家事の変化
2020年5月実施/インターネット調査/首都圏在住20～60代既婚女性500人



注3 2021年7月花王調べ。既婚男性55% (n=240)、既婚女性62% (n=320)

図8 テレワークのメリット

2021年7月実施/インターネット調査/首都圏在住25~64歳有職既婚男女(フルタイム, パートタイム)/女性320人, 男性240人(最近1カ月間に週1回以上の在宅勤務の経験有り)



高い様子がみられました。満足度の理由として、男女とも「通勤時間の削減」や「感染対策に有効」に次いで、「仕事の合間に家事や雑用ができる」があげられています(図8)。

また、仕事とプライベートの時間の組み方に自由度が増し、「昼休み中やテレワークの合間に夕飯の下ごしらえができる(30代女性)」など、家事をするタイミングも変化しました。家事をする時間について、フルタイム勤務の出勤者とテレワーカーで比較すると、平日8時~18時台の中で、テレワーカーは洗濯物を干したり、掃除や買い物をしたりなど、家にいるメリットをいかして、家事をする人が多いことがわかります(図9)。「洗濯は仕事の合間の気分転換と軽い運動になって良い。ときには掃除機を

かけて体を動かしている(50代女性)」など、仕事と家事を両立しながら新しい生活スタイルを始めている様子もみえました。子育て世代では、「朝に洗濯ができるようになり、出勤前にしていた夕食作りを昼食時に準備。おかげで、親子の時間が増えた(30代女性)」など、早朝と夜遅くに詰め込まざるを得なかった家事が、テレワークによって分散し、家族と過ごす暮らし全体にもよい影響を与えている様子もみられました。

3. コロナ禍を経て、これからの家事を考える

新型コロナウイルス5類移行によって、外出や出勤の機会が増え、家の中で快適に過ごす意識はなお高いものの、「こまめな掃除をするようになった」人も少しずつ減りました(図10)。先に示したように、男性の家事時間が大きく増加しているわけではないことも含めると、コロナによる変化が一時的なものという見方もできます。しかし、この15年ほどの間に、社会全体で在宅時間が増える出来事があり、その度に家事は変化しましたが、その知見から考察すると、今回の経験はこのあとの生活に大きな影響を与えるのではないかと考えています。

例えば2008年のリーマン・ショックの際は、生活者は旅行や外食を控え、家計節約のために家で過ごす時間が増えました。当時流行した各種の鍋つゆを使い、外食費節約だけでなく調理や片付けの手間を省く工夫をし、家にいるからこそ部屋干しの柔軟剤の香りを楽しむ様子がみられました。また、2011年の東日本大震災の際は、帰宅困難を避けるために在宅が増え、その中で節電・節水にも励んで

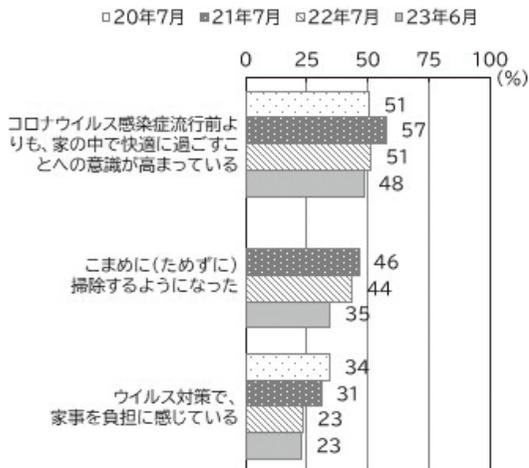
図9 平日の家事をする時間帯

2021年7月実施/インターネット調査/首都圏在住25~64歳有職既婚男女(フルタイム, パートタイム)/女性320人, 男性240人(最近1カ月間に週1回以上の在宅勤務の経験有り)



図 10 コロナ禍の家事意識

2020年7月, 21年7月, 22年7月, 23年6月実施/
インターネット調査/首都圏在住20~60代既婚女性各
500人



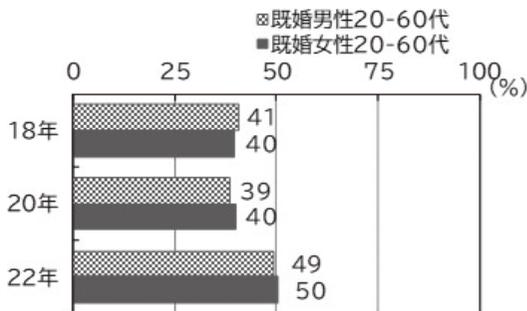
いました。水や食料品を備蓄し、断水した時のために風呂水を残しておき翌朝の洗濯に使うなど、万が一に備えながらも日々の家事にうまく組み入れ、節水にもつなげていました。

このような経験が生かされたと感じたのが、2014年の増税前です。節約のために多くの人が買い置きをしましたが、その商品の選別とストック管理には震災の経験が役立っていると考えられました。

コロナで時間の使い方を再配置した経験や、増えた家事をうまくまわす工夫など、これからの生活でも生かせる場面があるのではないかと考えています。

また、コロナをきっかけにリモートワークをはじめ生活の中でデジタルを利用する機会も増えました。オンラインショッピングやビデオ通話は年代を越えて広く普及し、オンライン診療やオンラインカウンセリングなど新しいサービスも増えました。車の自動運転など AI を使った新しい技術革新によって、暮らしが大きく変わる機運を感じていると思

図 11 AI やロボットにもっと家事・介護など日常のサポートをしてほしい



ます。「AI やロボットにもっと家事・介護など日常のサポートをしてほしい」と思う人はこの2年で急増し、生活者の期待が高いことがわかります(図11)。

ただその一方で、ロボットや AI に任せることへの不安や、逆に人間の能力や技術がどこまで必要なのか、ロボット任せで人間の能力が衰えてしまうのではないかと、新たな不安もあると思います。

また、誰もがスマホを持ち、さまざまな情報を手に入れられる時代であっても、基本的な生活情報が届いていないと感じることがあります。花王の Twitter から「柔軟剤と洗剤は同じ投入口や同じタイミングで洗濯槽に入れるとお互いが打ち消し合って効果がなくなり、きれいに洗えません」と発信したところ、想定以上に「知らなかった」と反響がありました(注4)。商品の中には柔軟剤入りの洗剤があることや、柔軟剤を「香りづけ」ととらえ、すすぎ後に柔らかく仕上げる役割として認識されていないなど、洗剤メーカーとして考えさせられる機会になりました。

生活が便利になる裏で、必要とされる基本的な生活知識や技術とは何か、未来の暮らしをよりよくするためにも、変化し続ける生活者の暮らしを常に把握する必要があると感じており、積極的に情報共有も行いたいと考えています。

【調査概要】すべて花王調べ

図 1, 2, 3, 4, 5, 6, 11

2006年, 08年, 10年, 12年, 14年, 16年, 18年, 20年, 22年実施/インターネット調査(一部郵送調査)/首都圏在住20~60代既婚男女/女性各711人, 687人, 856人, 938人, 932人, 931人, 956人, 946人, 921人, 男性各269人, 256人, 820人, 896人, 864人, 890人, 954人, 946人, 890人

注4 https://twitter.com/kao_attackjp/